

INET 2000 日本委員会 委員長 / 慶應義塾大学環境情報学部 教授

M u r a i J u n

村井 純

INET 2000 から始まる
グローバル時代のインターネット



INET 2000
special
interview



今年7月に横浜で開催されるINET 2000は世界100か国以上の研究者やユーザー、各産業界のリーダーたちが集結し、インターネットの次世代技術やビジネスモデル、グローバルコミュニケーションやインターネットが社会に与える影響など、インターネットのさらなる普及や未来の発展のために、さまざまな切り口から議論を行う非常に重要なカンファレンスである。今年で10年目をむかえる同会議だが、INET 2000日本委員会委員長の村井純氏に今回のプログラムの見所や、インターネットを取り巻く現状と未来予想図などについて伺った。

聞き手：インターネットマガジン編集部
Photo: Nakamura Tohru

☎：1992年に第1回のINETが神戸で開催されてから8年という月日がたちました。当時に比べ、私たちをとりまくインターネットの状況はかなり変わりましたが、今回INET 2000を日本で開催することの意義をどのようにお考えになっていますか。

村井：92年に開催した当時は、インターネットはまだ一部の人しか知らないという状況が背景にありました。92年にISOC(注1)という学会を作った時に「何でISOCを作る必要があるのか、なぜインターネットを組織化しなければならないのか」と言う声も多く聞かれました。アメリカは政府が協力的でしたからインターネットの普及は比較的スムーズでしたが、それはまれな例で、我々日本も含めて、ほとんどの国がボランティアでインターネットを浸透させようとしていましたから、非常に苦労していたのです。やはり活動の母体となる組織がないと動きにくくて仕方がないから、国際的に議論できる場を作りましょうということになりISOCを作りました。こうして、私たち日本勢は、INETを開催することの意義についてかなり強い意見を押し出していました。ISOCとして開催する1回目のINETは何が何でも日本でやらねばと……。まあこれはかなり個人的な考えでしたが、でも日本でやったことの意義は大きかったですよ。当時はインターネットを自分との関連として認識している人がごく少なかったわけだけど、日本で開催したからこそ、さまざまな分野の人が参加して注目してくれ

た。実際、INETをきっかけに多くの人がインターネットに興味を持ち始めてくれましたし、非常に仲間が増えたという感じがありました。今度の2000年でももっと大きな意味でそれと同じことが起こると思います。

今は世間のインターネットに対する関心は十分に高いですけどね。ただ、92年は本当に専門家や専門分野のためのインターネット会議でしたが、今回は「すべての人のためのインターネット」でなくてはいい。そういう意味では行政や経済など、それぞれの分野の中で真剣な使命感をみなさんが持っていると思います。92年がインターネット業界や学者のためのチャンスの場だったとしたら、INET 2000は行政をやっている方や起業家をはじめ、幅広い専門家の方たちにとってのチャンスの場になると思いますし、成果も確実に出るでしょう。

☎：INET 2000ではどういった面に焦点をあてて盛り上げていこうとお考えでしょうか。

村井：先ほど言ったように、行政や経済的な面もそうですし、あとはインターネットの技術面です。やはり今インターネットの技術は変わり目ですから。ネット上で映像がうまく配信できるかとか、情報家電がインターネットにつながってくるだろうとか、またそれと同時にセキュリティなどの新しい諸問題も出てきますしね。今まで次世代インターネットと言われていた新しい技術に関する話が、プログラムそのものだけでなく、活用法やその他の部分も含めてか

グローバルな共通認識が
インターネット上で作れることに
人類全体が自信を持ち始めた。

なり議論されるのではないかと思います。それからINET 2000のテーマは「すべての人のためのインターネット」ですから、バリアフリーの問題であるとか、女性がインターネットを使う場合と言った、新しい視

点で活発に議論されると思います。たとえば、INET 2000のパンフレットをPDFでネット上に置きました。すると、「これは目が不自由な方には読み取れないフォーマットだからHTMLにしてください」とまわりの人からすぐに指摘されて対応したりしました。みんなの意識がそういう方向になってきているということですね。

☞: そういった、だれもがインターネットにアクセスできる、アクセシビリティに関する特別なアプローチというのはISOCでほかにも何か行っていますか。

村井: 代表的な活動として、W3C(注2)が一番盛んですね。INET 2000でもそうした新しい問題意識の芽生えのような集まりがあります。これがいろいろな活動の出発点となることが多いのですよ。たとえば、前回のINETでは、「Women on Internet」というテーマで有志が集って議論する場がありましたが、今回は、そういう活動が大きな動きになってくるのではないのでしょうか。



村井 純(むらいじゅん)

慶應義塾大学環境情報学部教授。1999年慶應義塾大学SFC研究所所長。1984年JUNETを設立。1998年WIDEプロジェクトを設立。社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター理事長、インターネットソサエティ(ISOC)理事、ICANN暫定ボード。今回のINET 2000ではプログラム委員長をつとめている。

以前にも、INETでのさまざまな場面で、新しい問題意識が披露され、それに共感する人が集まり、その問題を解決するために、ポスターを貼ってどこかで集まろうと決めて議論すると、実際に資金集めをして研究活動をしたり、組織作りをするなんていう具体的な流れが結構生まれたりしました。そういう新しい分野で、今回のINETでどんな議論が始まるかは予想できませんが、いろいろと新しいことも起こってくるのではないのでしょうか。

☞: そういう役割を果たすために、ISTF(注3)というのがありますよね。

村井: そうですね。ただISTFと言っても、まだ実際の活動は本格的には始まっていません。ISTFはおもしろいですよ。普通、世界レベルで何かの取り決めをするときは、国の代表者が集まったり加盟国を作ったりして1国1票の選挙で決めたりするわけです。たとえば捕鯨制限を決定したときはこの方法ですね。インターネット技術の標準



を決めていく場合、歴史的にはOSI(注4)とIETF(注5)の2つの流れがありました。OSIは1国1票方式なのですが、結局OSIはうまくいかなかった。一方、IETFの場合は個人が参加し、みんなの技術や意見を持ち寄って、ワーキンググループを作るという方式だった。そして「本当に人に貢献している技術を標準技術としましょう」というルールができた。その結果インターネットの標準プロトコルのTCP/IPをはじめとする標準プロトコルに関する合意が形成されたという経緯があります。これと同じプロセスをインターネット上のさまざまな社会問題に応用しようというのが、ISTFです。

たとえば「子供がいるお母さんがインターネットを使うときにこういう問題がある」と考えた誰かが議論するワーキンググループを作る。そして「この問題はこうやって解決しよう」と決まったら、ISTFのワーキンググループの提案として世の中に出していく。そのうちに政府はどこにも関与していないけれど、その提案が結局グローバルな人類の共通認識になっているのではないかと考えているわけです。先ほどの話にも出た「PDFだけを置いておくのは避けるべきだ。目の不自由な人でも読めるフォーマットにしないといけない」というルールをISTFのワーキンググループで決めたとしますよね。そうするとこれはISTFのワーキンググループの何番に抵触するから、やめようということになる。いわば、みんなで決めたルールになるわけです。政府間の調整で決めるのではなく、いわゆる人類によるグローバルコンセンサスを作ることがISTFの流れの期待だと思うのです。今回のINETでは、最初の活発なISTFの活動が行われると思いますから、今後が楽しみです。

☞: ISTFのルールが一般の社会ルールになる可能性すらあるということですか。

村井: そうです。IETFがまさかこんなに標準として認められる活動になるとはやはり思っていませんでした。ISOで決めたことが国際標準なんだという共通認識だったのに、それを覆してしまったわけですから、これには大きな可能性もあると思います。

M u r a i J u n

村井 純

Q: 沖縄サミットは「ITサミット」と言われていますが、さまざまなルール作りを政府が行うのではなく、「インターネットコミュニティー」からの提案が社会を変えていくのでしょうか。

村井: 今のサミットに代表されるような、あるいは国連などの国と国との折衝の中のグローバルガバメントというモデルと、個人を要素としたインターネット上のグローバルガバメントの2つの流れがいろんな形で共存しながら進んでいくと思いますが、それぞれの役割は当分の間残ると思いますよ。グローバルなコンセンサスがインターネット上で作れるんだということに人類全体が自信を持ってきたわけだから、やがてはかなりの部分がインターネットコミュニティ上に置き換わる可能性もあると思います。


Q: そうなったら本当にすごいですね。INET 2000の内容に戻りますが、NTW(注6)はどのように参加者を選んでいるのでしょうか？

村井: 推薦と公募が一緒になったような感じですが、推薦が多いです。先進国からはあまり選ばずに、情報化の弱い順にしていますから、不公平ですよ(笑)。ヨーロッパや北米などには外国や地域の情報化、特にインターネットを援助するための基金を持っている国や連合があります。この南太平洋の島はどうもインターネット化がうまく進んでいないから、なんとかしようとなると、その地域のために資金を提供するような仕組みがある。このような組織では、設備やインフラは提供できても、なかなか教育は提供できません。人を派遣するという方法もありますが、そのような人は絶対的に少ないし、任期が終わるともどに戻ってしまうことが多いのです。一番いいのは、その地域のリーダーが育つこと。だから、このような組織に、リーダーになる可能性がある人を推薦してもらって、INETの機会に教育するという方法が有効なのです。NTWでは、こういった国の技術者ばかりでなく、IT政策を進める責任を担う政府の方など、さまざまな方が積極的に学んで帰られています。



Q: 最後に、ISOCとして今後やっていかなくてはならないこと、もしくはこれからの課題となることは何があるのでしょうか？

村井: インターネットの今後の課題としては、人々の新しい要求に堪える通信技術やネットワーク技術を進化させるというものがあありますが、インターネットによって地球規模で自由にコミュニケーションができるようになり、今までの価値観やこれまで制限があってできなかった新しいグローバルなステージでの人類の役割がどんどん新しく増えてきました。インターネットは人の役に立って人に貢献ができるテクノロジーであるべきですから、そういった社会的影響のフィードバックを考慮するべきです。技術だけが進化するのではなく、それが人に対してどういう影響があり、どういう利点があり、どういう反発があるかということもいつも考えていく必要があります。ISOCとINETの課題は、技術の進化とグローバルなステージでの人類の役割を共存させ、次の世代を生み出すことの手助けをすることであり、これが一番大きな意義でもあると思います。 ●●

INET 2000
 www.isoc.org/inet2000/
 開催期間: 2000年7月18日(火) - 7月21日(金)
 開催場所: パシフィック横浜
 公用語: 英語(一部日本語同時通訳あり)
 テーマ: "Global Distributed Intelligence for Everyone"
 主催: インターネット・ソサエティ (ISOC)
 共催: INET 2000日本委員会、社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター (JPNIC)
 協力: 日本インターネット協会 (IAJ)、WIDEプロジェクト
 後援: 科学技術庁、文部省、通商産業省、郵政省、横浜市、慶應義塾大学、日本経済新聞社

INET 2000を理解するためのキーワード

【注1】

ISOC(アイソック / Internet Society)
 1992年に設立された、インターネット関連では世界最大の非営利団体。国際的な学会であると同時に、インターネット関連情報についての広報機関、インターネット業界のコーディネーターとして役割を果たしている。

【注2】

W3C(ダブルユー・スリー・シー / World Wide Web Consortium)
 WWWの発展と相互運用性確保のために、企業や研究所、大学をメンバーとして設立された世界的な組織。HTMLやCSS、XMLの仕様書を勧告として公開している。

【注3】

ISTF(アイ・エス・ティー・エフ / Internet Societal Task Force)
 インターネットの成長と使用に関連した社会的、経済的な諸問題を分類するなどの作業を行うために、ISOCが作った組織。すべての人にインターネットが利用しやすいものとなることを目標としている。

【注4】

OSI(オー・エス・アイ / Open System Interconnection)
 国際標準化機構(ISO: International Standard Organization)が定めたコンピュータ通信の国際標準規格。通信の機能を7つの層に分けたOSI参照モデルというコンピュータ通信のプロトコル構造のモデルを提唱している。

【注5】

IETF(アイ・イー・ティー・エフ / Internet Engineering Task Force)
 ISOCの下部組織で、インターネットの技術に関する議論を行う組織。IETFで議論された技術はRFC(request for comments)というドキュメントでインターネット上に公開され、議論の末にIAB(Internet Architecture Board)でインターネット上の標準となる。

【注6】

NTW(エヌ・ティー・ダブルユー / Network Training Workshop)
 インターネット発展途上国におけるインターネット普及を促進することを目標にISOCが1993年より開催しているワークショップ。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp